Osaka University Knowledge Archive

Title	裏側から読む「心」
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文. 2007, 89, p. 25-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69096
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

裏側から読む「心」

出原隆俊

漱石の「心」は、日本の近代文学作品の中で、最も論考の多い作品とされている。上、中、下の各編の係わり、**先生**と**私**の関係、様々な登場人物の焦点化、登場人物の年齢の推定、遺書の公表という問題、動作も含めた微細な検討、テクスト内の〈矛盾〉の問題、「明治の精神」とは何か、私自身についていえば、「Kの代理としての私―「心」における言葉の〈連鎖〉について―」[1]で、とりわけてテクスト内の言葉の絡み合いなどに注意を払ってきた。それらをごく簡単に一括すれば、「心」の謎解きということになろう。論者の問題意識に基づいた、真っ向からのテクストの分析である。その前提として、作者漱石のこの作品に対する真摯な立ち向かい方ということが、疑う余地のない当然の前提としてあったろう。

ところが、それらとはまったく違った次元の問題が浮上すると考えられるのである。これまでの常識の枠を離れ、しかも、奇想天外な思い付きではなく、「心」という作品の生成に係わる重要な論点を、いくつかの角度から提出する。

一

此手紙が君の手に届いた時には、僕はもう此世にはゐないだらう。

多少とも文学作品に関心のある人に対して、この一節を含む小説は何かと問いかければ、たいていの人は**先生**の遺書が中心となる漱石の「心」の名を挙げるだろう。**先生**の手紙（遺書）を受け取った**私**が死の予告の言葉に接して、危篤状態の父を残して上京するという展開が極めて印象的であるからである。しかし、「心」の実際は次の通りである。

此手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。

「あなた」と「君」、「私」と「僕」という呼称に違いはあるが、ほぼ同文と言ってよい。「心」を思い浮かべるのは当然のことで

ある。前者は森鷗外訳「不可説」の一節であり、この直前にある「愛する友よ。」は、「心」とは明確に相違するので、カットして引用したものである。

もちろん、問題は、これが偶然の一致なのかということである。さらに、次の引用を行おう。

此遺書を発見する人は、小生が之を認め候時、傍の室にて妻の安眠し居たりしことを承知せられ度候。（鷗外訳「アンドレアス・タアマイエルが遺書」）

・

私は此長い手紙を書くのに、…何も知らない妻は次の室で無邪気にすや〳〵寝入つてゐます。（「心」）

隣の部屋で安眠している妻の存在。この設定の類似も重ねれば、同一の作品ではないが、いや、だからこそ、かえって、鷗外の翻訳作品が「心」に摂取されている可能性が高いのではないか、という強い疑念が浮ぶだろう。さらに類似する箇所を付け加える。

なぜわたくしは今日あなたに出し抜けに手紙を上げようと決心いたしたのでせう。…さて、当たり前なら手紙の初には、相手の方を呼び掛けるのですが、わたくしにはあなたの事を、どう申上げて宜しいか分かりません。「オオビユルナン様」では余り余所々々しうございます。「尊い先生様」では気取つたやうで厭でございます。（鷗外訳「田舎」）

・

私は其人を常に先生と呼んでゐた…。余所々々しい頭文字抔はとても使ふ気にならない。（「心」）

相手の呼称にこだわるということについての「余所々々し」いという表現は、「心」論で注目されたこともあるものだが、その一致も、鷗外の翻訳作品と「心」との関連を強く印象付けよう。表現の酷似ということでなくとも、内容の一致と云うことでは、次のような対応も視野に入れることができる。

もし女にこれから先の苦労をさせまいといふ情願が本当なら、自分がそつと身を引いてしまふのが一番好い筈である。どこか静かな土地を見付けて、そこで一人死ぬるのは、造作もない事ではないか、…その日には女を残して置いて、自分はこの世を去つてしまはなくてはならない。今の自分の存在といふものは、その日を待つてゐるに過ぎない。…どうも今になつて見れば小さい時から、自分で自分を観察する癖を付けたのが悪かつた。（鷗外訳「みれん」）

・

・私は妻を残して行きます。…妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。…私が死なうと決心してから、もう十日以上になりますが、…

・たゞ斯ういふ風に物を解きほどいて見たり、またぐる〳〵廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちやんと備はつてゐたのです。

・私は自分で自分が恥づかしい程、きよと〳〵周囲を見廻してゐました。…私は家のものゝ様子を猫のやうによく観察し

ながら、…（「心」）

※

頃日僕は一人の卑しい男に邂逅した。其人はそれ迄に一度も見たことのない人である。然るにどうも相識の人らしい容貌をしてゐる。若し僕が婆羅門教の輪廻説を信じてゐるなら、僕は其人に前世で逢つたと思ふだらう。（鷗外訳「フロルスと賊と」）

・

どうも何処かで見た事のある顔の様に思はれてならなかつた。然し何うしても何時何処で会つた人か想ひ出せずに仕舞つた。（「心」）

こうした他の箇所も視野に入れれば、鷗外の翻訳小説と「心」の関連はほぼ疑う余地がないと言えるだろう。漱石が鷗外の作品から、表現や設定を〈借用〉している。これは驚きである。従来、鷗外の「青年」が漱石の「三四郎」を意識していることなどが知られているが、このようなことはまったく指摘されてこなかった。なぜ、どのようにして漱石が鷗外作品を摂取したのかということは、当然のことながら綿密な調査が必要であり、今は回避しておくが、この〈事実〉の重さを確認しておこう。

「心」における他作品の摂取という同様のことは、次のことにも見られる。国木田独歩の小説「死」と「心」の関連である。

・厭世より起つた自殺だらうか、自分も諸友も富岡の人物の裡に何処か厭世の風があることは朧ろに感じてゐたがそれも明らかに意識してゐたのではない、自分とても渠の口から厭世思想を聞たことはない（中略）／さらば気が狂ッたのか、それにしても前兆が少も見えなかつた、それとも突然発狂したのか自分も人々もたゞ自殺の原因が解らない丈に何故自殺したかといふことのみ不思議で何んだか恐ろしい謎語を掛けられて解き得ないやうな心地がして（中略）／『まさか失恋ではなるまいね。』

・不幸にも渠は此方を向いてゐる、其両眼は半ば開き紅の血顔の半面にまみれ歯を喰ひしばり拳を固く握り其拳も亦た血にまみれてゐた（中略）／其鮮血淋漓たる亡骸が眼前に横はつてゐる。

・

・Kの葬式の帰り路に、私はその友人の一人から、Kが何うして自殺したのだらうといふ質問を受けました。事件があつて以来（中略）厭世的な考を起して自殺したと書いてある（中略）友人は此外にもKが気が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて教へて呉れました。

・襖に迸ばしってゐる血潮を始めて見たのです。私は突然Kの頭を抱えるやうに両手で少し持ち上げました。私はKの死顔が見たかつたのです。…眼の前の光景が官能を刺激して起る単調な恐ろしさ許ではありません。

これもまた、関連を否定しにくいであろう。もちろん、「死」において「自分」は友人の死にまったく関与していないのに対して、

「心」は自分が死に追いやったと思い続けるというような、決定的な相違もある。「失恋」ということについては後者が意識的に回避しているようにも読める。

独歩作品と漱石作品の関連ということでは、独歩の「富岡先生」を視野に入れればより明らかになる。田舎にいる時代遅れの「先生」がいる。自分の教え子が、東京に出て立身出世のコースに乗っている。その教え子と母を亡くした自分の娘を結婚させようとするがうまく行かない。そのいきさつを尋ねてきた人物に父が語るのを娘が襖の向こうで聞いて泣いている。この構図は、漱石の「虞美人草」と極めて似かよっている。さらに「彼岸過迄」の中に「非凡の経験に富んだ平凡人」という言葉がある。これは、独歩の小説「非凡なる凡人」を想起させよう。あるいは「驚嘆の念を以て眺めていたい」という敬太郎という人物の言葉も、独歩の「牛肉と馬鈴薯」に見られる「「吃驚したいというのが僕の願なんです」」に由来していると考えられる。漱石の独歩「巡査」をめぐる感想などもあり、漱石が独歩の作品を視野に入れていることは疑えない。

鷗外や独歩の他にも同じようなことがあるかどうかはともかく、こういうことが指摘されるとすれば、「心」を把握しようとするそもそもの根本が揺さぶられることになろう。乃木将軍の殉死の衝撃として鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」と「心」が並べて言及されることもあったが、作品執筆の〈動機〉に関する既成の理解の根幹が問われかねないのである。漱石の作品に同時代の他の文学者の作品の影があるとすれば、創作行為に係わる根本的な問題だと言わなければならない。漱石における外国文学の影響は知られるところであり、それは何も漱石に限ったことではないが、同時代日本文学との関連となれば、漱石という〈作者〉の位置という問題にもつながってこよう。

私は、以前に樋口一葉の作品に同時代の先行作品がおびただしく流入していることを検証した。[2] それは一つの驚きでもあったが、そこにはどうしても作品を完成させざるを得ない事情が看取できた。事情はどうあれ、漱石の作品にも部分的に同じような現象が見られるということの意味は小さくない。

また、明治天皇の死ということに関連しては、次のような、看過できない問題もある。

私は式が済むとすぐ帰つて裸体になつた。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のやうにぐる〳〵巻いた卒業証書の穴から、見える丈の世の中を見渡した。

この「遠眼鏡」に関して、大正天皇の奇行に関するいくつかの噂が想起される。その一つに「遠眼鏡事件」がある。これは、帝国議会の開院式で、壇上で詔勅を読み上げた大正天皇が、持っていた証書をくるくると巻いて、遠眼鏡のようにして議員席を見回したというものであり、大正天皇の痴呆症状に関連付けられて言及されている。このことの真偽やいつの議会のことかも定かではない。仮に、「心」の執筆の時期に漱石がこの噂を耳にしていて、「遠眼鏡」を持ち出したとしたら、不敬罪に関わるような事がら

である。そうだとすると、「心」執筆の背後に明治天皇の死とそれに続く乃木将軍の殉死の関連の問題を見る従来の常識とはまったく違った視点で考察されることが要請されるであろう。大正天皇をめぐる噂との関連を明らかにする手立てはないと思われるし、単なる類似にしか過ぎない可能性が大きいが、簡単に切り捨てるだけではいられないのではないか。

無理なこじつけを重ねたいのではないが、白紙で、細部にこだわって「心」に対面する必要を痛感するのである。

二

ところで、「心」における先生の遺書は、先生がKを裏切ったことを一生引きずっていることが中軸となっている。しかし、先生は一体どんな裏切りをしたというのだろうか。Kに何も語らずに先回りして奥さんに御嬢さんを妻に貰い受けたいと申し出たことを当人は裏切りと理解している。その際には、言い出すチャンスを狙って先生が仮病を使ったこともあり、卑怯な振る舞いという印象を読者にも与えがちであり、当人もそのことに拘泥している。しかし、そのことなら、Kにも同様のことを指摘することも可能である。そうなると、先生の自己認識のありようも問われることになる。列挙してみよう。

私は夏休みに何処かへ行かうかとKに相談しました。Kは行きたくないやうな口振を見せました。無論彼は自分の自由意志で何処へも行ける身体ではありませんが、私が誘ひさへすれば、また何処へ行つても差支へない身体だつたのです。私は何故行きたくないのかと彼に尋ねて見ました。彼は理由も何にもないと云ふのです。宅で書物を読んだ方が自分の勝手だと云ふのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体の為だと主張すると、それなら私一人行つたら可からうと云ふのです。

このことについて、次の箇所を対比してみよう。

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと云つてゐました。私が帰つて来たのは九月上旬でしたが、彼は果して大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠つてゐました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼は其所で自分の思ふ通りに勉強が出来たのを喜んでゐるらしく見えました。私は其時彼の生活の段々坊さんらしくなつて行くのを認めたやうに思ひます。

もちろん、以前の「騒々しい下宿」とは違うということはあろう。しかし、「涼しい所で勉強した方が、身体の為だ」という先生の主張を退ける理由にはなるまい。「行きたくないやうな口振を見せ」たという記述も、微妙な捉え方と言えよう。はっきりと言明しないで、あいまいなKの態度にその時の先生は不審な思いを抱かなかったのであろうか。少なくとも、「口振を見せ」たように捉えたと記述するように〈作者〉が仕立てていることは看過できないのではないか。これを視野に入れれば、Kが「行きたくないやうな口振を見せ」ることの裏が問われる必要があるのではない

か。なぜ「行きたくない」と言い切らないのか。自らの口で明言せずに、しかし、そのように受け取ってほしいというのは、明言することに躊躇しているということではないのか。「私一人行つたら可からう」と先生の意思を尊重するように言うことの背後には、自分だけが御嬢さんの傍にいたいという思いが潜んでいたと考えることが十分可能なのではないか。この直前には、「今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、其時にもう充分萌してゐたのです」とあるのであり、先生がKの言葉に疑念を持たなかったのだとすれば、先生こそ「(Kは―論者)余りに単純でした」ということになろう。また、次のようなこともある。

其日は時間割からいふと、Kよりも私の方が先へ帰る筈になつてゐました…私はKに何うして早く帰つたのかと問ひました。Kは心持が悪いから休んだのだと答へました。

これは、先生の仮病と対応するのではないか。他にも例がある。

私がKはもう帰つたのかと聞きましたら、奥さんは帰つて又出たと答へました。其日もKは私より後れて帰る時間割だつたのですから、私は何うした訳かと思ひました。奥さんは大方用事でも出来たのだらうと云つてゐました。

つまり、K自身が先生の先回りを図った可能性が十分に想定されるのである。「何うして」、「何うした訳か」というような似た捉え方が繰り返されているのにもかかわらず、先生がそうしたことに気付いていないことになっている。先生がKへの疑念を抱かないのは不自然ではないだろうか。かりに明確には認識していないとしても、先生の仮病は無意識のうちにKに倣ったと言い得るのではないか。明らかに〈作者〉は読者には分かるように合図を送っているのではないだろうか。

一方、先生がKを裏切ったということについても、先生のその思いに偽りはないとしても、Kが本当に裏切られたと感じているのだろうか。その根拠はあるのだろうか。自分が告白した時に先生が御嬢さんとの係わりについて言ってくれなかったという思いは当然あるとしても、自分の先回りをしたというように考えることはあるのだろうか。そのようにKが受け止める必然性はないのではないか。むしろ、自分が御嬢さんへの思いを告白したから、先生が前から決まっていたことを、自分から直接に述べるのではなく、奥さんを通して明確にしたのだ、というように思うということも十分に考えられるのではないか。配慮と捉えることさえあり得るのではないか。それであれば、遺書に「今迄私に世話になつた礼」が書かれてあることも皮肉ではなく読むこともできる。

先生が先回りして申し込むという裏切りをしたから御嬢さんと結婚することが出来たわけではないと考えることが必ずしも無理でないことは、Kの墓が出来た時のことを参照すれば、より明確になるのではないか。

妻は定めて私と一所になつた顛末を述べてKに喜こんで貰ふ積でしたらう。私は腹の中で、たゞ自分が悪かつたと繰り返す丈でした。

ここでも、先生は自分の裏切りを悔い続けているが、御嬢さんが

「Kに喜こんで貰ふ積」であるというのなら、御嬢さんは先生との結婚を望んでいたと先生がこの時点では考えていることになるのではないか。御嬢さんにKへの愛情があったなら、こういった振る舞いにはならなかったはずである。それならば、Kが先に求婚しても、その希望は実らないはずである。先生の策略が効果を上げたとはいえないのである。そうであれば、実際は「悪かった」というのはあくまでも先回りをして求婚したという「策略」についてだけのことになる。

このように考えれば、先生の苦悩の根幹が揺るがされることになる。先生は苦しむために苦しんでいることになり、その思い込みに読者が同調を強いられてきた、というような言い方も荒唐無稽ではないと考える。Kが御嬢さんのことで悩んでいる時に「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と述べたことを、「もし誰かが私の傍へ来て、御前は卑怯だと一言私語いて呉れるものがあったなら」と悔いているのだが、それとは逆に、たとえば奥さんが「あなたのせいではない。初めから娘を挙げるつもりだった」と言ってくれたら、先生の苦悩はずっと軽減したはずである。

三

先生とKの関係について、根本的に問い直す必要が生じるとすれば、先生が自分の下宿にKを呼び寄せた経緯についても、検討すべき問題がある。

Kの養子先も可なりな財産家でした。Kは其所から学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私と一所でなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。其時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にゐました。山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を睨めるやうなものでしたらう。二人は東京と東京の人を畏れました。それでゐて六畳の間の中では、天下を睥睨するやうな事を云つてゐたのです。

ここに見られるように、先生とKは「同じ下宿」に住まっていた。ところが、先生がその下宿を出ることになった経緯はどう記されているのか。

金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構へて見やうかといふ気になつたのです。

ここにはKという存在がまったく関与していないように読める。先生とKの係わりを振り返っておこう。

私は不平と幽欝と孤独の淋しさとを一つ胸に抱いて、九月に入つて又Kに逢ひました。すると彼の運命も亦私と同様に変調を示してゐました。

こういう展開は、さらに次のように続く。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になる迄、約一年半の間、彼は独力で己れを支へて行つたのです。

この間に、先生は奥さんの家に下宿することになるのである。

私のやうなものが、突然行つた処で、素性の知れない書生さんといふ名称のもとに、すぐ拒絶されはしまいかという掛念もありました。私は止さうかとも考へました。然し私は書生としてそんなに見苦しい服装はしてゐませんでした。それから大学の制帽を被つてゐました。

大学に入るのを期に、「騒々しい下宿を出」るという先生の状況と、「独力で己れを支へて行つた」Kに対して「理否を度外に置いてもKの味方をする気になりました」とあったはずの先生の振る舞いとはまったく合致しないといえよう。傍でKの苦難を見つめているのであれば、一所に居た下宿を一人で出るというのは、「檻の中で抱き合いながら」暮したという先の記述からは、考えられないのである。さらに、別の箇所では次のように記している。

私の心は沈鬱でした。…それでゐて私の神経は、今云つた如くに鋭どく尖つて仕舞つたのです。

私が東京へ来て下宿を出やうとしたのも、是が大きな源因になつてゐるやうに思はれます。…元の通りの私ならば、たとひ懐中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかつたでせう。

ここでも、「彼の運命も亦私と同様に変調を示してゐました」ということについて配慮しているような何らの気配も感じられない。ただ自分ひとりだけの問題を抱えていたとしか読めないのである。これはちょうど、次のような先生の私への態度と同じである。

あなたの地位、あなたの糊口の資、そんなものは私にとつて丸で無意味なのでした。何うでも構はなかつたのです。私はそれ所の騒ぎでなかつたのです。

しかし、遺書に記されたことに基づくならば、「約一年半の間」御嬢さんに心を引かれながら、一方ではKの成り行きを見守っていたことになる。御嬢さんの家に下宿することによって、自分の心が「快活になつて来た」から、Kにも同じ経験をさせようと、Kを自分の下宿へ呼び寄せ、そのことから御嬢さんをめぐる確執が生じKを裏切ったと思い込むという設定が、小説の展開上どうしても必要であることから、Kと関係なく下宿したというような展開があると言えるのではないだろうか。整合性が保持できないという場合には、このような事情が背後にあると考えられるのである。

四

これまでに述べてきたことのほかに、「心」には解明できない部分もある。私の故郷が「田舎」とされ、しかも、「停車場のある町から迎へた医者」とあるように、田舎でも外れにあることが強調されているだけで、どこであるかは想定できないのである。消去法でゆくと、先生の出身地は新潟であるからその方面は排除される。兄は「遠い九州」にいることになっている。海水浴に一緒に行った友人が中国地方の資産家の息子とされていることなどから、私の故郷は九州でも中国地方でもあり得ない。「奥さんの父親はたしか鳥取か何処かの出」とあることは、日本海側を排除

しよう。故郷から上京するとき「東京行の汽車に飛び乗」ることから、四国でもあり得ない。父母の言葉からいっても関西ではあり得ない（「虞美人草」にもあるように、関西の言葉に言及しないことは考えにくい）し、東京は当然、関東も日光に旅行した先生夫婦から便りをもらっていることなどから排除されよう。北海道についても四国と同様の事情があるし、北海道であれば、その土地を示唆する記述がないのは極めて異例のこととなる。田舎の父母の言葉から、東北でもなさそうだが、言葉を除けば問題点はなさそうなので、そのように推測する向きもないわけではない。しかし、地域性を表すものはまったくない。先生の家に椎茸を土産として持って行くということはあるが、その特産地は少なからずあり、決め手にはならない。油蝉とつくつくぼうしの登場も地域特定の手がかりとはならない。奇妙なことに私の田舎は、どこにも想定されないことになる。他の人物の出身が明示されていることと比べ、対照的である。

地名について言えば、「野分」の白井道也の三つの任地はすべて明示されているし、「それから」の平岡や「門」の宗助の勤務地も示されている。また、三四郎が熊本出身であることについては、様々な形で、その土地柄が話題となっている。また、東京以外の場所が、作中に出現する場合には、「坊っちゃん」をはじめ「二百十日」、「虞美人草」、「行人」など、必ずといっていいくらいに、地方色が取り込まれている。あえて言えば、「心」の場合は自分の故郷なので珍しい風物として把らえるものはない、と考えられるが、それにしても地域性の排除は徹底しているといってよいだろう。

テクスト内で描かれている二度の帰省について、東京と田舎の間を移動する車内の光景なども一切描かれていない。これも漱石作品のテクストの中で、「三四郎」の終盤で、三四郎が帰省する際の様子が描かれていないことなどを除くと、例外的といってよい。「坊っちゃん」、「虞美人草」、「彼岸過迄」、「行人」、「明暗」などでは場所の移動の過程は重要な働きをしている。「三四郎」においても、冒頭から移動の場面が克明に描かれているし、終盤の部分も美弥子の結婚の確認と云う決定的な事がらが終わった後の、三四郎の空虚さを表す機能を担っていると考えられる。つまり、そのように処理される必然性があるということである。

このことなども考え合わせれば、地域を示さないことについて、おおよその見通しが出来るのではないか。瀕死の父を置いてまで東京を目指そうとする以上、私には先生の自殺を思いとどまらせる可能があるかも知れないという思いがあると考えられよう。その際に土地が明確であれば、東京までの所要時間などが明確になる。一刻も早く東京へという思いがあるはずの私の振る舞いにリアリティを持たせるためには、通過する地域なども取り込まざるを得なくなろう。そうしたことを排除するために、ただ「田舎」を強調するのに終始するのではないだろうか。

「他の時間と手数に気の毒といふ観念を丸で有つてゐない田舎者を憎らしく思つた」とあるように、東京と対極にあるというイ

メージだけが必要だったのではないか。

私の故郷の地名が示されていないのはたまたまのことではなく、意識的になされたもの、あるいは措定できなかったということではないかと考える。

五

同時代先行小説の取り込み、エピソードの背景をめぐる問題、Kが先生に裏切られたと本当に思っていたのかということ、先生が下宿を移るいきさつ、先生の故郷の場所が明示されていないことなど、「心」の中心的な論点からは一見外れているような問題が、実は「心」というテクストにおいて、そもそもの執筆の動機から始まって、予想外に重要な論点を提起しているのではないか。

いたずらに奇策を求めるのではないが、テクストの隙間、あるいは裏側からも新たな読みが求められると考えるのである。

「心」の本文は岩波書店『漱石全集』（一九九四年）、鷗外作品は同『鷗外全集』（一九八六～八年分）により、ルビは省略した。字体は現行のもの。

注

（1）『国語国文』二〇〇七年十月号

（2）「お力の登場―「にごりえ」における借用について―」（『文学』一九八八年七月）、「「たけくらべ」の成立基盤」（『国語国文』一九九一年十二月）、「《典拠》と《借用》―水揚げ・出奔・《孤児》物語―」（『論集樋口一葉』（おうふう、一九九六年十一月）